松江城下町の考古学　— 地面の下の松江城下町遺跡 —

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団　埋蔵文化財課　小山泰生

はじめに

国宝松江城を中心として、その周囲に広がる松江城下町遺跡の発掘調査は、平成18（2006）年度から本格的に始まり、平成29（2017）年度までの約12年をかけて継続的に行われてきた。調査開始以前には、遺跡が現在の中心市街地と重複していることから大部分が消失しているものと考えられていた。ところが、実際に調査を進めていくと、地下には良好な状態で遺跡が残っていることが明らかとなってきた。

これは松江城下町遺跡の特徴のひとつでもある水田や低湿地を埋め立てて形成された城下町であること、そして城下町形成以後も数回にわたって嵩上げ造成を繰り返しながら継続してきたためであり、厚い造成土に覆われた古い時期の地層ほど遺構と遺物が良好な状態で残っている。

今回の講座では、平成30年8月に完成した城山北公園線（大手前通り）沿線の松江城下町遺跡で見つかった遺構と遺物を中心として、現時点での発掘調査成果から判明したことについて解説したい。

近世考古学と陶磁器研究の概要

近世考古学とは

歴史考古学（有史考古学）のひとつで、いわゆる江戸時代を中心とした「近世」の遺構や遺物を対象とする考古学のこと。多くの歴史書では、織田信長や豊臣秀吉の時代を「安土桃山時代」と呼び、慶長8（1603）年に徳川家康が江戸に幕府を開いてからは「江戸時代」と呼称されている。

近世考古学と陶磁器研究の通史

明治…輸出品として陶磁器への歴史的関心から陶磁器研究が始まる。

大正…彩壺会（さいこかい）などにより実証的研究の本格化。→伝世品とともに窯跡出土資料を研究対象とする。

昭和…1930年代：日本民藝協会の設立。→日用品生産主体の地方窯への注目。

1960年代：近世陶磁器の考古学的研究が本格化。岐阜県土岐市・佐賀県有田町などで窯跡の発掘調査が始まる。1969年の日本考古学協会第35回総会にて中川成夫氏・加藤晋平氏により「近世考古学の提唱」が発表される。

1970年代：高度経済成長による全国的な開発の活発化に伴う緊急発掘の増加により埋蔵文化財行政の整備が進み、考古資料の数が急増する。1974年から江戸遺跡（東京）の発掘調査が始まる。

1980年代：各地域で近世考古学関係の学会が結成される（江戸遺跡研究会・関西近世考古学研究会・九州近世陶磁研究会）。→情報交換や共有、議論の活発化。

平成…1990年代：近世における陶磁器の生産地である三大窯業圏（肥前・京焼・瀬戸美濃）や消費地である江戸や大阪での調査研究が蓄積される。→これらの地域の成果によって近世考古学が急速に進展する。特に大窯業地である肥前と瀬戸美濃の陶磁器編年が整備されたことにより、全国各地の近世遺跡の年代比定に大きな手がかりを提供した。

2000年代：近世遺跡の発掘調査は減少傾向にあるものの、仙台・徳島・広島などの地方都市遺跡やその他の地域で近世遺跡の発掘調査や陶磁器編年の研究が進められる。

★全国的な近世遺跡の調査が一段落した時期に始まった「松江城下町遺跡」の調査は後発となるが、これまでに各地で進められてきた調査研究の蓄積を投影できるという点で恵まれた環境下にあるといえる。

1．松江城下町遺跡の発掘調査の経過

松江城下町の立地と構造

松江城下町は、島根県東部の松江市にある松江平野の中央に所在する。松江平野の北には島根半島の山地、南には中国山地へ向かう高地が存在する。東には境水道を介して日本海と繋がる中海、西には大橋川・中海・境水道を介して日本海と接続する宍道湖の汽水域が広がる。

松江城築城と城下町建設は慶長 12（1607）年に着手し、慶長 16（1611）年に完成したとされている。城下町の全体構造は、北側に寺社や武家地が点在する丘陵を背にし、城を中心として東西に武家地を配置して左右を固め、その南側に末次地区の町人地を東西に展開させている。天然の堀となる大橋川で区切り、その南側に白潟地区の町人地と寺社が展開し、さらに南側には竪町を置いている。

多くの武家地が置かれていた橋北地域には、城の東側に重臣が居住する殿町があり、さらに東に上級・中級家臣が居住する母衣町がある。城の西側には中級家臣が居住する内中原町がある。これらの武家地を外堀で囲み、外堀の東側に町人地である米子町、さらに東に下級家臣が居住する北田町・南田町が展開する。南田町の一角、城下町の南東端にあたる場所には重臣を配置して出城のような役割を持たせていた。外堀の西側には下級家臣が居住する外中原町があり、北側には町人地である北堀町、さらに北側に武家屋敷や寺院が点在する奥谷町が展開する構造となっている。

松江城下町遺跡における時期区分

堀尾期…堀尾氏が松江城築城および城下町建設を開始したとされる慶長 12（1607）年前後から寛永 10（1633）年

京極期…京極氏が藩主となり統治していた寛永 11（1634）年から寛永 14（1637）年

松平期…松平氏が藩主となり統治していた寛永 15（1638）年から明治 4（1871）年

主な発掘調査事例

松江城下町遺跡の発掘調査は、松江市橋北地域（大橋川より北の地域）を主体に進められてきた。

・松江歴史館整備事業に伴う発掘調査（平成 18～20 年度）。

・広島高等裁判所松江支部・松江地方裁判所合同庁舎新営工事に伴う発掘調査（平成 23～24 年度）。

・城山北公園線（大手前通り）都市計画街路事業に伴う発掘調査（平成 18～29 年度）。

→城山北公園線沿線の発掘調査実績は、本発掘調査＝60 地点　立会調査＝500 地点。

城山北公園線の発掘調査の概要（資料①　図 1・2）

・調査原因は、道路拡幅工事に伴う発掘調査。

・拡幅工事は、島根県民会館前から国道 485 号線（くにびき道路）までの東西 1,047m区間。

・2 車線の車道の 4 車線化。車道部整備前幅員 8～10m→整備後幅員 19m、歩道部片側整備前幅員 1.5m→整備後幅員 5m。

・発掘調査は事前の試掘調査成果を踏まえて、遺跡が確認された地点については遺跡とした上で本発掘調査を行っている。電線共同溝埋設、上下水道管やガス管等の管路掘削、その他の掘削工事が発生した狭小範囲や道路横断部分などは立会調査で対応。

・発掘調査で検出した主な遺構には、城下町形成以前の水田跡、城下町の外郭施設に関わる堀や土手、屋敷地内の施設に関わる建物跡や庭園遺構、日常生活の痕跡を直接的に示す廃棄土坑（ゴミ穴）、地鎮具や祈祷具が埋納された祭祀遺構などが挙げられる。

→検出した遺構の配置は城下町の施設や屋敷地の土地利用を反映しており、その検出位置から遺構の性格が推定できることが多い。

2．城下町をつくる　―城下町造成前夜―

・松江は宍道湖と中海を繋ぐ水上交通の要衝で、戦国時代の初めにはすでに白潟の地に町場が形成されていた。

⇒城下町造成以前の松江には末次・中町・白潟の3つの町場、末次・中原・黒田・奥谷・菅田の5つの村（名）、3000石の田地が広がっていたとされる。

・松江城下町の成立は、17世紀初頭の堀尾氏による松江城築城に始まる。

⇒狭隘な富田（安来市広瀬町）を廃し、宍道湖に面する領国支配に適した水陸の交通路の結節点を選択。末次・中町・白潟の既存の港湾集落（町場）を取り込むように城下町を形成。

・城下町形成以前の周辺一帯には低湿地が広がっていたとされる。発掘調査では、その頃の地層から「水田跡」やヨシやガマの地下茎を含む「湿地の堆積層」を検出。

水田跡（母衣町）

米子川西岸で検出。水田跡では畦畔と耕作面が見つかり、土壌分析から稲作を示唆するイネ科の他、ソバやセリなどの花粉化石が検出されている。

湿地の堆積層（南田町）

城下町形成以前の旧地表面の上面で、コケ類が繁茂している状況を確認。南田町周辺は、水辺にほど近く陸地化していた湿地帯と想定。

⇒村（名）の周辺域に広がる水田や湿地帯を埋め立てて城下町の造成を行っていたことが、文献だけではなく考古学的な知見からも判明。

3．城下町の形成と屋敷地の造成

・城下町の形成にあたり、まず初めに城下の区画割と地盤の排水のために「素掘りの大溝」の掘削を行っている。発掘調査で検出した素掘りの大溝は、屋敷地と屋敷地の境界にあたる「屋敷境大溝」と、道路と屋敷地を区画する「区画境大溝」の2種類に大別できる。

屋敷境大溝

溝幅2～4mを測り、隣接する屋敷地の側面や裏手に位置する場所で検出。初期段階は素掘り溝で、その後は掘立柱を伴う塀や石組水路へと変化する。屋敷境は江戸時代を通して位置は踏襲されるが何度も改修が加えられ、長期間にわたって維持管理される。

区画境大溝

溝幅5～6mを測り、道路の両側に並行する形でほぼ直線的に掘削され、街区を大きく縁取るような位置で検出。区画境は城下の地割と初期造成を行っていた時期だけに機能し、造成完了後には一気に埋め戻され、かなり短期間でその役割を終える。現段階で他府県の城下町遺跡ではこのような遺構は確認されておらず、松江城下町遺跡の中でも特徴のある遺構と評価できる。

⇒素掘りの大溝の掘削時に生じた残土は屋敷地内に盛られ、城下町形成初期の造成土として利用される。この造成土の上で最初の生活が営まれ、城下町が成立していく。

・屋敷地の造成は、屋敷地全体を一律に嵩上げするのではなく、まず建物予定地だけが先行して盛土されている。これは、低湿地に形成された徳島城下町の調査で最初に確認された整地手法で「島状整地」と呼称されている。島状整地とは、屋敷地の周囲に溝や土取穴を掘削し、その土で造成初期段階に建物を構築する部分にマウンド状の高まりを持たせる。その後、高まり周囲の土取穴や低位部に土砂を投入することにより屋敷地の平坦化を行う整地手法のひとつである。徳島城下町では16世紀後半以降の侍屋敷において通例的に見られる手法と報告されている。

⇒松江城下町では17世紀初頭（堀尾期）の城下町形成段階から島状整地を採用しており、17世紀前

半（松平期初頭）の屋敷地にもこの整地手法が施されている状況を確認。このことは、島状整地が17世紀初頭に限られた整地手法ではなく、低湿地を抱えた土地における地盤の嵩上げ手法であり、また、徳島と松江のように地域を越えて流布していた整地手法であった可能性が想定される。

・屋敷地の造成は、初期造成以後も繰り返し行われている。調査地点によって造成土の厚さや堆積状況は異なるが、江戸時代から現代までの間に約1.5～1.8mもの嵩上げ造成が行われている。

・松江城下町遺跡の地層（資料②　図3・4）は、城山北公園線を東西軸で見た場合に城下町造成以前の旧地形は西から東へ向かって徐々に傾斜していることが分かる。城山北公園線沿線の主要遺跡14地点の土層断面を基にMJ0～6層に分類して基本土層を組み立てた結果、城下町初期造成土であるMJ4層は下位の自然堆積層であるMJ5・6層の傾斜をそのまま踏襲しており、城山北公園線の西から東へ向かって雛壇状の造成を行っていたものと考えられた。これは母衣町の米子川（外堀）や南田町の入り堀などの堀区画を利用するとともに、初期造成完了後の城下町の排水を考慮した結果と想定される。初期造成以後の造成土はMJ3層が該当し、この時期の造成面は城下町の平坦化を指向している。これ以後に施されたMJ2層の造成面は凹凸面が顕在化しており、城下町全体が一律に嵩上げ造成されたのではなく、各屋敷地単位での嵩上げ造成が行われた結果を示している可能性がある。

4．外郭の整備

・近世遺跡において堀や溝は普遍性の高いものである。かつて陸地部との間に存在した川や水路は城下町形成以後も残され、城郭や城下町を画しており、堀区画の役割を果たしている。発掘調査では、城下町形成当初の堀状遺構として「障子堀」や「土手」を検出。また、外堀として開削された米子川の西岸には「外堀石垣」が残っていた。

障子堀（南田町）

江戸時代に入り堀となっていた場所で17世紀初頭の堀の一部を検出。堀底で方形土坑が3基見つかり、障子堀と呼称される堀施設であることが分かった。障子堀とは、堀底にあたかも障子の桟のような仕切障壁を設けることによって堀を渡る外敵の勢いをそぐための防御機能を高めた堀のことである。17世紀初頭は、豊臣家と天下統一を目指す徳川家との関係において緊迫した時期であり、戦乱の勃発を予感させる時期でもあった。そうした時代背景から、堀尾氏は自らの城郭の防御を固めていたことが想定される。

土手（南田町）

城下町の東端にあたる現在の田町川の西岸で17世紀初頭の土手の一部を検出。土手の規模は上端幅2m、下端幅4.3m、高さ0.74mを測り、断面形は台形を呈する。土手の下部構造としてマツ・タケ・ウツギ・シダなどの枝や葉を敷き詰める「敷葉工法」が採用されていた。敷葉工法を施すことにより、土手の浸透水をすみやかに外部へ排水して土手の崩落を防ぐ目的が想定される。見つかった土手は堀尾期絵図に描かれている土手の位置と一致しており、城下町の東端には土手が築かれ、城下町と湿地帯を画していたことが発掘調査成果からも裏付けられる成果が得られた。

外堀石垣（母衣町）

江戸時代に外堀として開削された米子川の西岸で17世紀前半の外堀石垣の一部を検出。現在の護岸の約5mほど奥側から見つかる。石垣の規模は高さ1.5mの3段積みで、根石の直下には胴木を2本伴う。石垣の石材には差し渡し1.2mを測る巨大な大海崎石が利用され、川に面する石垣の表面にはノミ工具などで丁寧に加工された痕跡が見られた。

⇒こうした堀や土手などを整備して城下町の外側を囲うことで、城下の人々の安定した生活を目指し、ひとつの町として発展していく。

5．武家屋敷の暮らし

・発掘調査によって、武家屋敷での人々の暮らしの一端が見えてきた。その内容は、住居としていた建物（掘立柱建物跡・礎石建物跡）、周辺施設（溝・廃棄土坑・地下室・石組水路・井戸）、生活文化（茶室跡・庭園遺構）、信仰や祭祀（地鎮・祭祀遺構）など多岐にわたる。

・当時の建物の上屋は残っていないが、発掘調査では建物の礎石や柱の基礎（柱穴）の痕跡や造成土の違いなどを手がかりに屋敷の規模や配置構造、造り替えの有無などを復元していく。

重臣屋敷（殿町）

松江城の北惣門（脇虎口）の正面に位置する重臣屋敷の発掘調査では、屋敷境を境界として南北に並ぶ2つの屋敷地の調査を実施した。広大な面積を確保して発掘調査を実施した結果、17世紀初頭～19世紀後半までの遺構面を検出した。主な遺構には、建物跡・屋敷境・庭園遺構・溝・土坑・井戸などが見つかり、地鎮・祭祀遺構も検出している。特筆すべき点は、これまでの松江城下町遺跡の発掘調査の中で唯一、京極期と考えられる遺構と遺物が見つかっていることである。

大橋家与力屋敷（南田町）

1638年以降の松平期に大橋茂右衛門の屋敷地の一角に与力屋敷が配置されていた場所の発掘調査では、畑跡・建物跡・屋敷境・地鎮遺構・溝・土坑などが見つかり、与力屋敷の変遷が明らかとなった。特筆すべき点は、堀尾～京極期の絵図では空白地となっていたが発掘調査成果から畑地として利用されていたことが判明したことや、陶磁器組成を考える上で良好な資料が得られたことである。

・屋敷内での生活は遺物から窺うことができ、陶磁器類・土器類・木製品・金属製品・石製品などの生活道具、瓦・柱材などの居住関連遺物、煙管・玩具などの趣味や嗜好の遺物、大工道具や製材・鍛冶に関わる遺物、魚骨・貝殻・果実の種子などの食物残滓、加工痕をもつ獣骨・骨角製品など、多種多様で膨大な量の遺物が出土している。

・出土遺物の中で中国磁器・肥前系陶磁器・瀬戸美濃陶器などの編年研究が進んでいる陶磁器を年代の指標とし、検出遺構や各遺構面に序列をつけることで遺跡の年代比定を行っている。

6．町屋の暮らし

・米子川の東岸には、江戸時代初頭から現在に至るまで「米子町」と呼ばれる一画が存在する。この町の呼称は、江戸時代初頭に「伯耆国米子」出身の職人たちが当地に移住してきたことに由来するという伝承が残っている。

・米子町の発掘調査では、陶磁器の他に武家地では見られない多種多様な職種に関わる遺物が出土。

漆塗り容器⇒**塗師**

道具類…墨壺・差金・ぶんまわし（コンパス）・釘・錐・砥石⇒**大工**

金工品…煙管・小柄・切羽・鏑・笠鞐⇒**鋳物師**

金属加工…坩堝・鉄滓・鞴の羽口⇒**鍛冶屋**

細工品の原材料…加工痕をもつ獣骨・牛の角芯・アワビの貝殻⇒**細工職人**

・出土遺物から米子町は武士階層の需要に対応できる様々な職種があったことが想定され、武家地の中に配置されていた町屋の特徴を見出すことができる。

7．近世から近代へ

・明治時代の廃藩置県によって城下の武家屋敷は取り壊され、その廃材の多くは屋敷地内に大規模な廃棄土坑（ゴミ穴）を掘削するなどして処分されている。

・江戸時代の広大な屋敷地はそのまま公共施設として利用されたり、短冊状に細かく分筆されて庶民の住まいへと変化する。
・廃棄土坑は屋敷地の側面や縁辺の空閑部分から見つかり、建物の解体に伴う瓦の一括廃棄土坑や陶磁器類の一括廃棄がある。
・近代の遺物も多数出土。母衣町の松江憲兵分隊跡地では磁器製の「松江憲兵分隊」の表札が、松江裁判所では磁器製の「防衛食容器」が出土。防衛食容器は、戦時中に缶詰の代用品として流通していたもので、非常食として保管されていた可能性がある。その他に近代のゴミ穴から飲料・調味料・薬品・化粧品などの日用品として使用されるガラス瓶や容器が出土。

8．武士の食卓

・発掘調査で出土した多数の食物残滓から、松江城下町の人々の食生活の一端が垣間見える。
・食物残滓は主に廃棄土坑から出土する。ただし遺存状態はその場所の環境に左右される。
・生ゴミとして廃棄された植物や果実の種子、魚類や貝類などの水産物、哺乳類や鳥類などの動物の骨が出土。魚類、哺乳類、鳥類の骨の中には「解体痕」と呼ばれる調理された痕跡が見られるものもある。
・松江城下町遺跡では貝類の出土量が多いのが特徴。特に赤貝（サルボウガイ）の出土が最も多く、その次にヤマトシジミが続く。2番目に多いのが魚類で、特にマダイの骨が突出して多い。このことは「赤い鯛」への需要の高さを示している。水産物は日本海沿岸や中海・宍道湖で獲れたものが流通していたものと考えられる。

9．器の流通

・これまでの発掘調査で出土した陶磁器類は数万点におよぶが、松江城下町遺跡は陶磁器の消費地として、その編年研究を進めている段階にある。松江の陶磁器組成は17世紀初頭がスタート地点。
・松江城下町遺跡における陶磁器の変遷を大枠でまとめると、17世紀初頭までに流通していた桃山陶磁が徐々に減少して中国磁器と肥前系陶器が主体となっていた時期から始まる。1638年以降には肥前系磁器が松江に入り、1650年以降には肥前系陶器が減少して肥前系磁器が急速に増加していく。18世紀には肥前系陶磁器に京信系陶器や在地系陶器が加わり、19世紀には肥前系陶磁器が減少して在地系陶器が主体となる時期へ移行するという変遷を辿る。

おわりに

松江城下町遺跡の発掘調査成果について解説してきたが、これまでの調査で得られた考古学的な知見から城下町形成以前の状況・城下町建設当初の状況・城下町成立以後の建物の建て替えや嵩上げ造成がなされていたことなど、文献史料には残っていない当時の姿を断片的ではあるが明らかにしてきた。

こうした成果は発掘調査だけで明らかになってきたものではなく、地質学や科学分析などの自然科学分野、文献史学や建築史学などの人文科学分野による調査研究によって得られた成果によるところも大きい。一方で、まだまだ課題も多く、藩施設・町人地・寺社地の土地利用状況や階層性の実態など解明すべき点が山積している。

今後は松江城下町遺跡を様々な分野の視点から見直し、そして共同研究を継続的に進めることで新たな理解へと繋がり、より豊かな松江の城下町像が描けるものと考える。

なお、今回の講座の詳細は『松江市史　別編１　松江城』「第六章　地下に眠る城下町松江」および「第九章　松江城下町遺跡」に掲載されている。ぜひ御一読していただきたい。